

## 【「生活が陶冶する」…形成から発達へ】

このフレーズは、晩年80歳のペスタロッチが『白鳥の歌』（1826年）で明らかにした教育原理で、ドイツ語では、Das Leben bildet.です。陶冶は教育のことですからこれは「生活教育」とは何かを表わす簡明なスローガンです。

ところがこれは様々な意味を何重にも積み重ねたドイツ語独特の表現で深淵です。Lebenは、英語でlifeですが、生活、生命、生、いのち、人生などの意味をもち、bildenは名詞ではBildungで、教育（初等教育がElementarbildung）、教養（教養小説がBildungsroman）、陶冶、形成などの意味をもっています。英語ではformingでしょうか。

目的語がないので、生活がつくるのか、何を

つくるのかわかりにくいのですが、bildenは再帰的というより、能動態と受動態を兼ね備えた中動態の動詞だと考えるとよいようです。つまり、生活の中で、子どもたちや教師の生命（主体）が自ら自己運動をして世界に働きかけ、生活（世界）を変えていく、を通して自ら

## 生活教育 キーワード

も変わっていく、と理解すると少しはわかりやすくなるでしょうか。「形成」と訳すだけだと、①自己形成、②外から意図的に形成されること、③無意図的社会的影響、などが混乱した概念になり、ナチズム教育に悪用されました。漠然さにとどまらないで、ペスタロッチ、スペンサーを経て、①の〈自己形成〉を

〈発達〉に深め、発達から全体を構造的にとらえる探究が続いています。マルクスだと〈労働〉、田中昌人だと〈可逆操作〉です。

働きかける仲立ちに〈書物〉を考えると、教養や生活綴方（友だちの表現）の意味を豊かにとらえられます。文学を読むことが自己形成のモデルにもなっていました。最近だと、井上雄彦『バガボンド』や尾田栄一郎『ワンピース』の人間発達への影響は無視できません。

（研究部・加藤聡二）

文献① 登張正実『ドイツ教養小説の成立』弘文堂、1964年。特に1882頁。

文献② 勝尾金弥『伝記児童文学のあゆみ—1891から1945年—』ミネルヴァ書房、1999年。